

外孫者

乙丑正月九日

良友信田三郎君に屬す

余數く運上^所又^至里^一又^若又^{相見}ゆ^るの^春脱^を得
 ぬ余思ふ^又新^年祝^日も^已了^り又^至里^一又^若又^{相見}ゆ^るの^春脱^を得
 ぬ^近に^始り^て又^至里^一又^若又^{相見}ゆ^るの^春脱^を得
 ぬ^良地^を撰^りん^と又^至里^一又^若又^{相見}ゆ^るの^春脱^を得
 ぬ^を敬^む然^る也^とも^余君^に任^居を^知ら^ぬ又^至里^一又^若又^{相見}ゆ^るの^春脱^を得
 ぬ^日曜^一時^に余^を信^じり^ん又^至里^一又^若又^{相見}ゆ^るの^春脱^を得
 ぬ

癸二月一日 後漢子 於て

ル デ ホ ト ロ ウ

州 務 署

返翰ニ及ハス

外務省

乙丑正月

今般舟人より支那通商所用出役陸田之所宛書
 管掌封差出惟間披封及海為被一覽仕惟処製鉄
 鐵搬運船方信習等事、付云々申裁惟候、有
 之別段心障之故も蓋之惟間本紙之製鉄所裁
 江相也、得文差上申惟候、其段申上惟以上
 丑正月

兼池仔録守

田村肥後守

柴田日向守

外務省

外務省
星野復中守
江連加賀守

乙丑正月

併國公使在ベルリン、製糖所取建之儀并
引合候書

一當時亦有合亞國の買上製糖區域取立申分

海軍方士官

一人

並兼方

一人

同下職

三四人

西國勘定方

一人

但此金運拂詰勘定は勿論外國船修後見積

外務省

外務省

り其事出来可申人物出候之事

彼我兩國計吏との筆勘致し符合致す候取計
此事

但横須賀に出来之上も同巧相心得此事

任事之儀より有合申軍艦の修獲出来可申候

帆船柱等鋼具帆柱造一式出来為申候積り

但取建場所の多し當時横濱本村一取

建相成横須賀表取軍艦港に出来之上同巧

一列移り積

若不用取相成を得し取相成共又ハ時

宜し等其修取据置し取宜夫迄取買入

元代並諸雜費共取取取可相成見込

一併國より新規取取等相成横須賀一取取立可

相成製鉄造船修船場の仕掛取見込

取金取々取取取取

都合四十取取百四拾万取

組置械取入職人掃取諸取用品買入代共一

式

横濱表本村一取取建可相成取國取買入取

械取建取及取小取組取一式取百四拾万取

中小船より居る事

一 修船所或ケテ所

内 是ケテ所大
是ケテ所小

但大ケテ方ケテセ三ラミス船以上ケテ船ト白也

而修獲出来可申此分来事取立ケテ積ル

小ケテ分輕莫門翔鶴丸ケテ而船造而修獲相成

可申此分最初取建當年内取成切ケテ積

一 造船場三ケテ所

而國外國船其修獲事ケテ節ケテ手明ケテ相成也

小ケテ其節ケテ一同造船ケテ方一相廻ケテ而間修

船造船ケテ二局ケテ近傍ト取建而中ケテケテ黄
相立申也

一 製法所是ケテ所

洞鉄其外諸入用品惣而而國産相用也物不

相成也而ケテケテ叶候トケテ得共最初ケテ而取案

内ケテ織ト可有而取ケテ而市中其外國商人ケテ

取入ケテ代料ケテ候ケテ前文惣入用ケテ内取置

申也

一 地所ケテ候ケテ間口四百五拾間真行百間程ケテ地

所入用相成其條職人ケテ居ケテ地所等入用トケテ

彦名

觀音崎株嶋一由臺場取立可相成若葉立由入
用別口由由彦名事

三ヶ所砲臺仕備繪圖面共伴國人也傳習可申
上事

一入用品之内壁石若本山石炭直股品合早由
取廻之事

石炭泄定之上品合石且水中保方多覺束事
節支手入之上製煉可申事

一伴國地中海續きトウロン單艦港地勢甚横須

質小彷彿仕事得共由要害之横須賀之方却る
巨敷由彦名

製炭所造船所修船場等由出来之模攝大抵右
トウロン由做出來可申續)

但規模之石トウロン三分二少狭之出来相成可申事
右之由思召相叶之速之繪圖面之添入由覽由入
可申事由國政府於而得之由評議相成可然被
思召由之再奉國政府之繪圖面差違之是亦允
可之上取致之可申事

前文之通申上事得共由評議添入用諸品取廻

州務

直取貯味及諸職人選分手配等は従是六月
費可申也

但奉國政府へ主届致して宜敷由國政府於
て可然社思召在節は直由地行平均由取掛
り可申也事

右中立通由出来を得て奉中官吏三指人諸職
方二千人等子透取懸り居莫大之由國益相成
由美等相違奉之由

前文中上由諸器械由取入之由外兩國政府永久
由懇交之儀取表し由決方之由奉國移る由唯

名譽之相成在成利と録一中在老高估由由託
一相成由り之由相遠四五倍由相成可申其美
終之由了解社下由括由申立其許振方之由由
盡力可社成也

本月廿七日セミラミス船アドミラル出
帆之由廿五日迄由由決是約定書由遣之由事

外務省
附録

外務省

書面之紙或以稍早之取柄可被中閣之事

製紙所掛
元

外務省

外務省

[Large empty rectangular frame]

乙丑正月廿九日

併蘭西全權之ニストル

エキセルレンシー

レヲレロセス江

以書翰申入俄汝程我製鉄所一条之始是書其件は差
違可申旨其裁り役人に申渡り是俄語を和語に別
別紙綴書差進俄國藩子せらるゝ故在俄汝汝申入度
如斯俄轉具漢言

元治二年乙丑正月廿九日

水野和泉守花押

外務省

酒井 龜輝 守 宛押

外務省

約定書

今般横須賀湾に得角西園之用徒、候に製鉄所を
 取建するに付、之に役と高橋等一処上等炭坑官へ九子
 一室其技、長一ある友を以て薦揚せらるるアト之
 う一凡重情を以て上海より右へ九子一を被呼出
 同意あり之に傍る由後、の各先初事と処の条目
 方々通し

一製鉄所を、所造取揚大小或は所造取揚三ヶ所或
 是處及び役人職人等々住所共々四ヶ所よりて居

外務省

成之事

一 横濱等湾地及び地中海沿岸下口之湾、似あるは多
製鉄所を右地方に取建ある様式を倣ひ大規模四
百五十間堅固なる地帯を以て取建する事

一 製鉄所敷設敷地を三万取建諸人用敷地九高一ヶ年
六十万ドルに都合四ヶ年或百四十万ドルに
るに成る事

但得而西政府は約定書相届作上り右に六十万
ドルに取建遣へし九四ヶ年之間年々納方下
ルラる差支不申極可致事

右に西國政府に允准を経て又後於に其上等炭
官へル子に又吾君を命せらるは我等於に約定奉
行松平對馬守軍艦奉行木下謹吾目付山口源河守
栗本濃兵衛兼淺野伊賀守に命ら其取扱を命じ以
願成功を要するとのあれば又是被内外に間隔
なく懇願を本として取扱するの也

元治二年乙丑西月廿九日

水野和泉守花押

酒井飛騨守花押

此書連否詳ナラスヨシ書翰目錄ニ記載アリ

乙巳二月三日

佛蘭西ミニストル、同國士官ベルニより差出たる書面の譯

レヲシロワンスツバルニ海軍士官エンゼニハ
エー左の書面を差出たり

横須賀製鉄所者都而繪圖面の通り佛蘭ミニストル
及ヒアトミラール承知の上日本政府へ申出直小取
建小懸るを「ハルニ」を右繪圖を日本政府へ差出
し直小立度て政府小請ひ日本横須賀製鉄所件を全
体總裁の命允を得し既小命允の上を佛蘭都府へ
来るべき日本使節の事九百を殘引受て世話致し

右小付ても佛港マルセリ迄出迎へ横須賀候へ都て書面小記載せる通の新小受る役儀を精勤すへ此時よりして右横須賀の件を出来する迄總裁の役を勤むへしおき小因日本役人と異なる変あり故小佛國政府の俸給を不受改て日本政府より受領すへき莫勿論あり其俸給の数を都て日本在留ニーストルの定小従ふを就ては佛國より日本へ来る海路諸費及び日本政府の用向小つき佛國中へ往來する旅費をヘルニ自己既小受領する処俸給内にて違ひ拂ふを若し此入用日本政府にて仕拂へし其

夕
孫
省

間ハヘルニ一の俸給ハ半を減すへヘルニ日本へ来る後或ハ病又ハ振出来の上歸國する入費も是又自己にて可仕拵固ては着國迄の間其俸給ハ全數受取應へヘルニ差出たる此書面日本政府於て許へくの上ハ此度の全國立寄りハ日本政府の命しるべき費用ハ日本政府より受取るへし若し一ヘルニ一奉揚事故ありて再乗難波船ハ佛國迄日本使節の人と共に誤り別と然るべき人物等に出へし其時の今迄は約定せる製鉄所件を踐らば引継ぎ傳達して遺漏ありへし

外務省

加 藤 村

へルニ一此度の佛行飛脚船上の中にて行へし其
費用洋銀八百枚前光宇波より来る貸式百枚と保
せて都合一千枚とある同人俸給ハ元一ヶ年洋銀
一万枚位但し勤方よりして相増へし

ロートル給料一ヶ年洋銀四千二百枚

へルニ一俸給ハ元一ヶ年洋銀一万枚位と有るが

廉勤考より魯國製鉄機械裁英吉利國より雇上

るもの一ヶ年五千枚と兼申候元製鉄所より叶刺と岩

折候俸給より毎口産候

佛軍海軍士官エンセニ一レエ子一トロートルハ横

演於て製鉄所取建の事ニ就き棟梁多し是れ其職務
ハ元百残りあく書面及び繪圖面の如く相心得世話
いふは是れ佛國職人三人迄ハ雇ひ使ふ事を許す其
余ハ不得あり但し一人の給料ハ一ヶ月の多きも一
百枚の數ニ出へりは日本通詞一人平生共ニ起居
するに此製鉄所を取り扱ふ内ハ朝夕此更とのに後
事をへしと高取の更の如きは何れも不限一切携ハ
る更を不得若日本政府より鑑定の変更を命せらる國
内遠方の處ニ往しむるとも必其命ニ従ふへし其旅
費ハ政府より出ツへし若し未開の港又ハ他の場所

外 務 省

ニ政府の命ニ因リ往くときハ必佛國士ニ届出ヘ
其勤役中の俸給ハ公使より取極メ日本曆ニ從ヒ月
々給すヘ一住宅ハ自合メテ取建ヘ一其地所ハ日本
政府より製鉄所畧界メテ凡二百坪程受取ヘ一若一
年半の後政府の志ニ叶ヒ満悦スル程の精勤ヲ事ハ
其居宅地所共ニロートルの有トあるト一不然政府
の心ニ不叶節ハ地所居宅共ニ取上げヘ一尤其節日
本大工キ人佛業西大工キ人ニテ其費用ヲ積リ合セ
其入用高ハ受取極メ只今よりロートル一年半勤役
すヘ一其中若日本官吏ト議論スル更ニ其ハ佛コシ

加
積
書

シエル出をを裁判を猶不决是ハミニストルニテ決
在也一右兩人俸給ハ勿論都テ惣勘定中ニ籠ル
其居宅地所共ニロートルの有トある此際ロ
トル所ニ備メテ而テ取極メ又其地所外國
人ニ有テ若シ候儀ニ不好儀ニ有テ既ニ歐行中儀
リ候説ハ度候字漏生國都府前林邊ニ一區ニ地
所ヲ魯西亞國ニ與ヘテ由右ハ學國前王ニ寄テ事
ニテ今ニ至リ後悔ヘテ後害ヲ残セテ云々等ヲ承リ
候

外
務
書

外務省

乙巳二月四日

以書狀送管上候茲在佛公使より横須賀表製鉄
所繪圖面即枚差出内于枚ハ惣建物神理在圖面
一枚ハヘルチ一奉國際航中當方ニ而可取建圖
取ニ而右ノ外寫出來法一其間則差進申在経建
物繪圖面も寫取然り中故是亦出來次第一ニ差
進在且右在紙表枚ノ方ニ寫海佛公使一送運却
在儀ニ付何是も寫ニ而差進在儀ニ而所在問在
様ニ並知可付成在右ノ儀得可意度ハ斯ノ所在
以上

外務省

二月四日

栗本順多務示

外務省

杉平對馬守給

山口縣河守給

本下薩守給

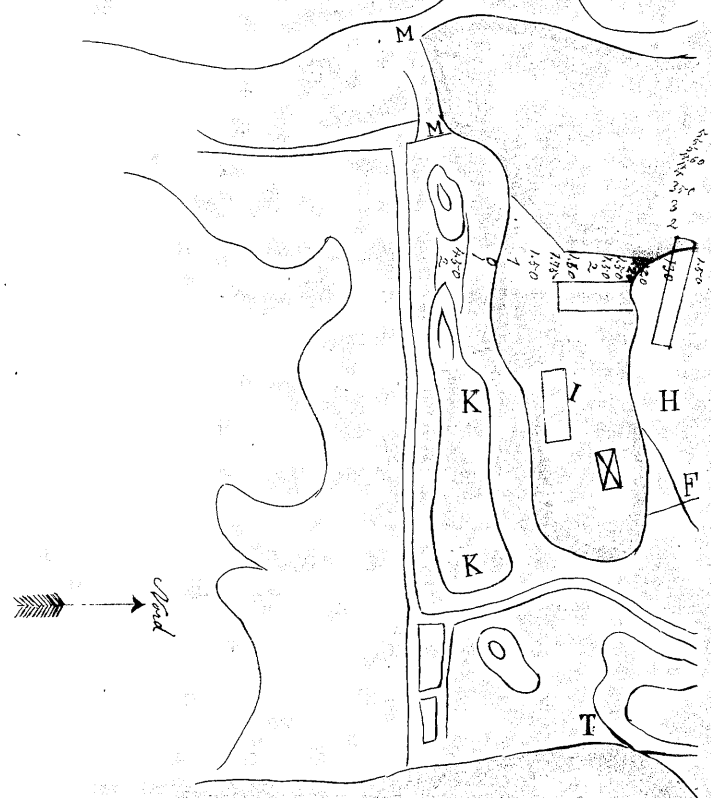
淺野伊賀守給

尚以前書繪圖面附言釋書一通在加掛中一
内狀則伊賀守給同以私狀も差進中本配
達可被下本是又神志川奉行より製法所無
中為本支配向く者右面達裁本間為正心得是
示差進中本

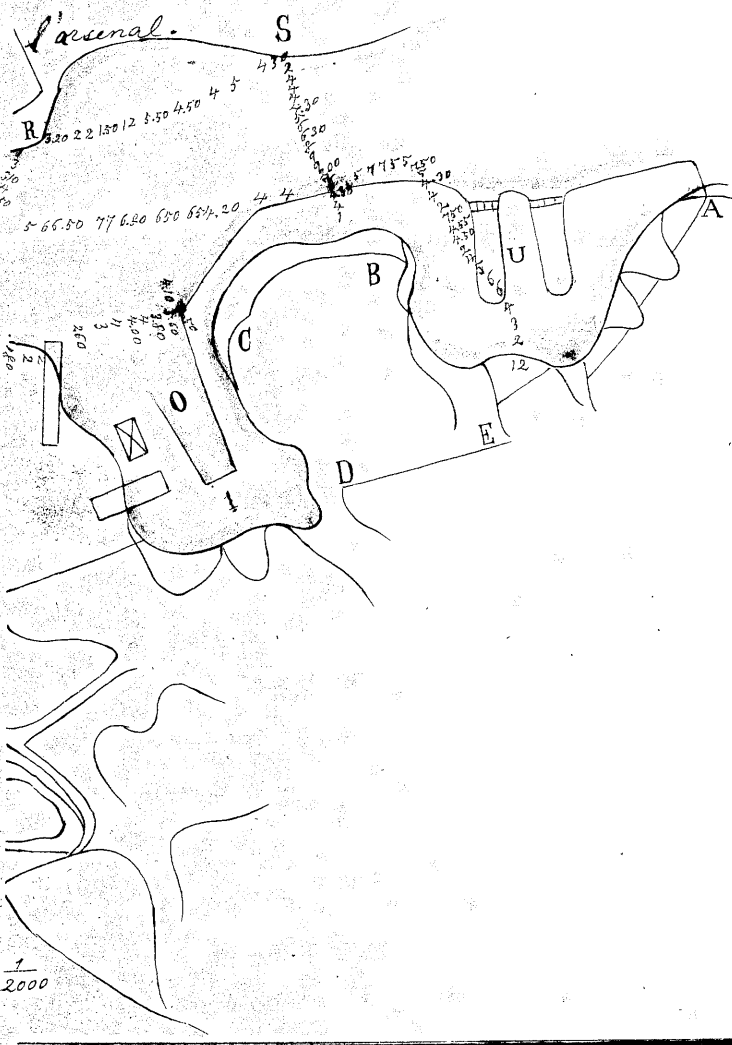
外務省

*Plan de l'arsenal
Plartenal d. Tokoska*

Ce croquis représente les dispositions générales de



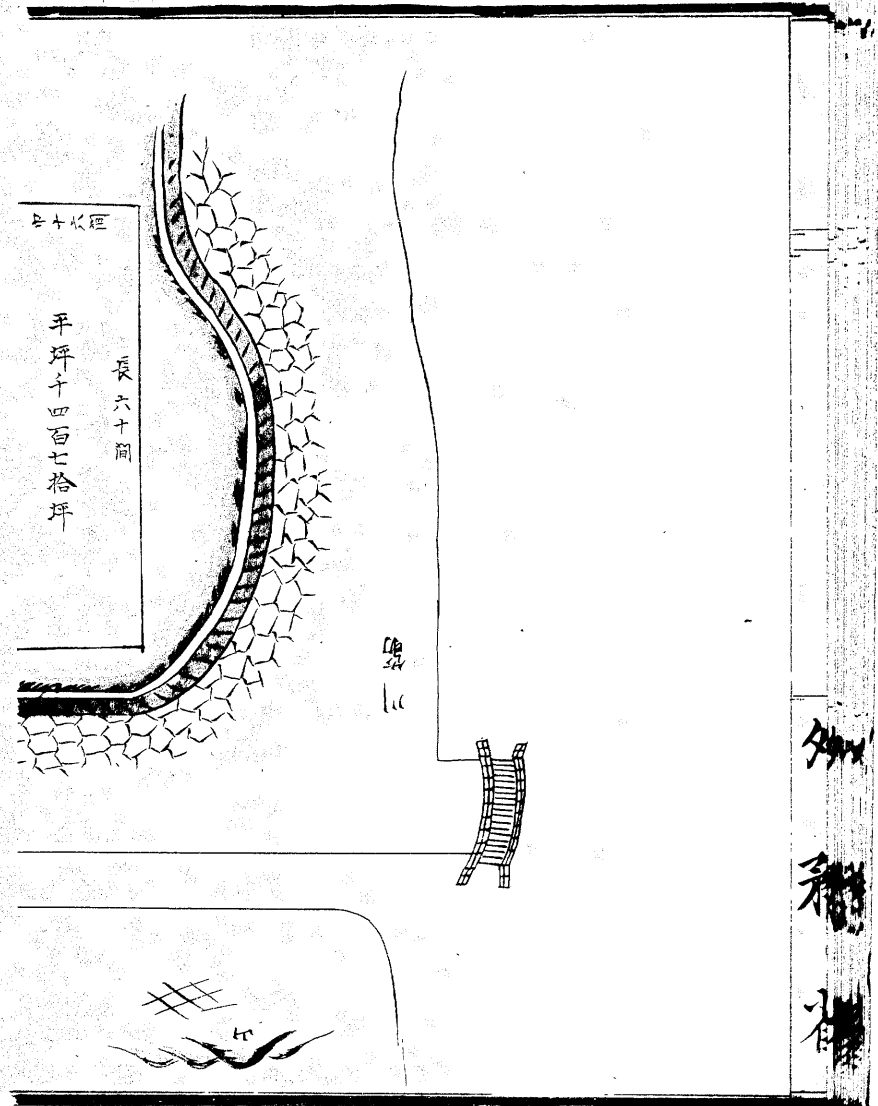
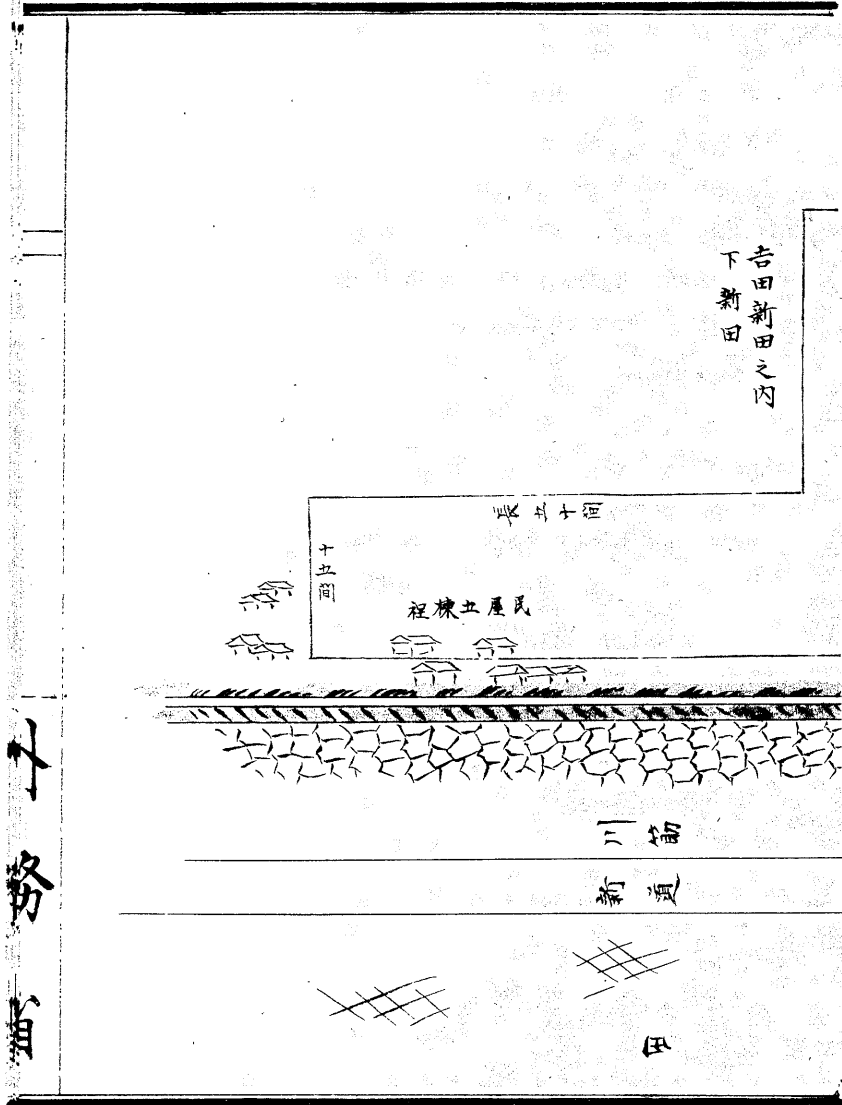
12 9 3 7 6 5 4 3 2 1 0 10 20 30
Echelle de 0^m 005 = 0^m 11, 12 7 1999 2/30.



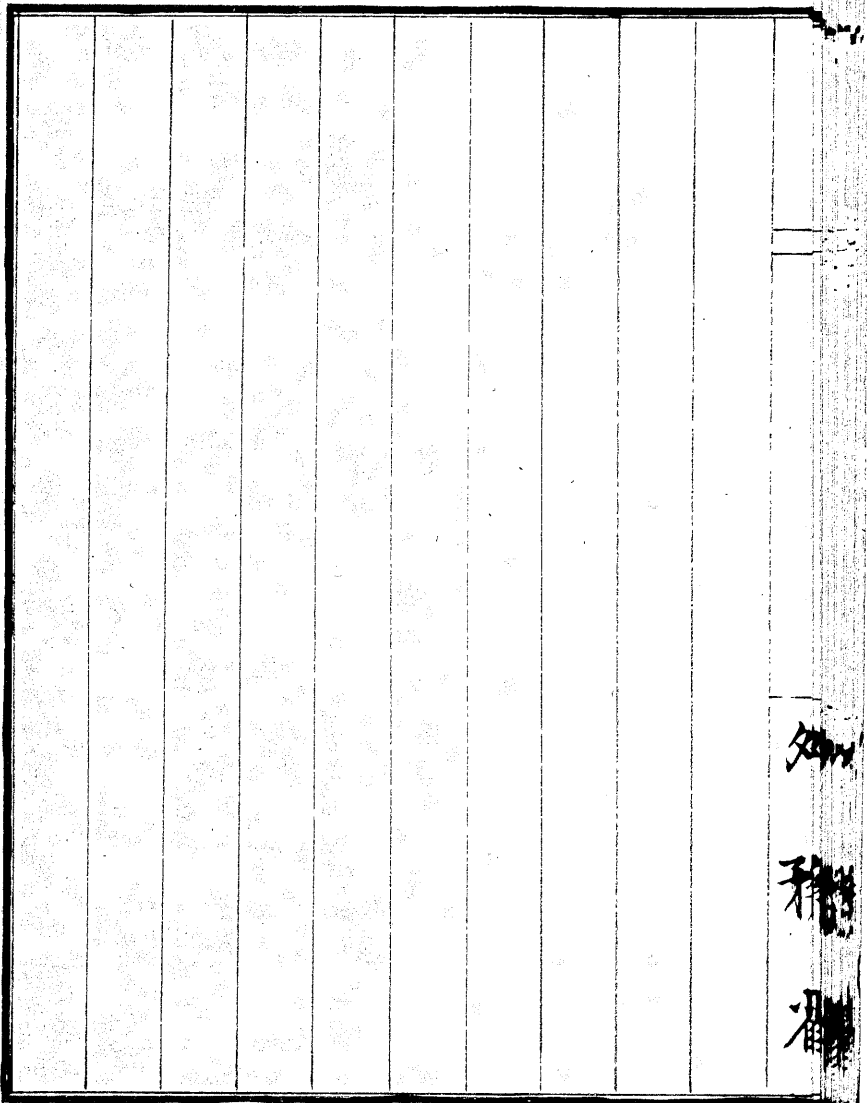
1/2000

盛 器 子

天 龍 閣



知
種
類



横須賀製鉄所圖之附言

i O Uハ湾 E Hし Bハ同亭 K K共小ヘルニ

始り次三官の居宅を建つ諸棟梁ハ i 小住居す

A M 小番所三ヶ所取建つ屋し夜分ハ T T の往

来を禁を保道路ハ開く屋し i ハ石残埋立地と

を土を近側の山より取ら春秋満潮の所水平よ

り二尺の高とす此間民居十軒あり皆取ら掃ふ

屋し H の山多く土を削く屋し i 此間の高を

残し雷むし i の水櫃赤線ハ石或ハ木を以て

外務省

有る可ありとも同様あり候し其内一間深の水
 を存せししにも埋立魚し山際赤綿造土を掘り
 取ら魚しし當時此候石灰と火山の灰を野
 ふ[△]ハ棟梁を置く場野と其上の赤綿角ハハツ
 テイテ打建及び塗師を置く俵の職人素より従
 ひ先此處に置く家を建する地取二尺高の土場
 し平均を家作ハ入口窓其外共諸式成り丈洋人
 風の働ひ造るを要を下棟梁ハ外床六俵子十二
 又下職人の食机六外床十二俵子十二
 右丁バルニ今日開帆俵行商守中無相違取立

夕
 積
 積

の更

但日本二月より五月末迄の出来の積り
 石灰未だ火を不經者二行り見奉社造り事甚繁
 機的心得あり者兩人程急速社造通群勢古速の
 出来は格不致候而者不都合し事横須賀測量園
 出来次第公使館へ社造候事

申主類右邊各極多件々申越之と重書謝之而之
五世後回若少形五深具評言

元治二年乙丑二月七日

酒井元澤守花押

未翰公散快

乙丑三月

大艦由製造者本枝に續舟中上者書付

小栗上野外
山口野外
大日向野
下野内
石野内
東野内
浅野内
伊賀守

今般佛人、由委任之由相別横須賀表等一造般
製鉄造形、場野中由取建相成、由中由大艦
由製造者、由同所由成功、由上、容易、由出来、由中
由願、由石、由中、由相成、由本枝、由中、由宿、由必需、由
由上、由中、由向、由中、由願、由中、由材、由大材

子務書

分相撰伐出し相應之場野一四圍至相成其外
 諸國山林之内より買上之上是亦四圍之仕事
 有之大概四五艘位之製造言先ツ西義支も
 幸之我之を得右連も速上手順立伐出し方
 取針至石中在る之新材を以て製造之相成也
 之保方方不置其間何色月も兩三年四圍至木
 深十分之相告也而用ハ相成也仕度在之付
 此節より支之也所至西義支方と奉海在在之
 材之生木採し居在分伐出し方仕事止之仕法
 之也海在在之新材之傷之何走も數百年を不修

外務省

有る之木材之生木ハ一之伐之掌之在處常時
 生木採し居也船之製造之由是方之可相成木材も
 太極敷之限も可有之候然之也船之由是方採
 し居木材之保方方ハ何柄之置宜しく取針也
 共二三拾年之内之朽腐可及木材之音也其年
 數之引競を得之通之木材也其之當り之付諸
 本義音方仕法不相立也而之雅相叶候之業也
 存込置在之處此程佛人口ツトルト云々木下大
 内宛一横文之書付差紙有之付和解仕事要別
 紙寫之通船材蓄蓄方之候之方之私に見込日案

外務省

乙白熟考仕木中右中至多入都白可然其下付
 只今より右仕法相立木持仕度奉存木然る兼
 る口ツトル一申之ニ小材ニる木品之証合取
 相分木間大材数奉熟見い多一産段申聞其美も
 中産木子分右申之通一見發させ木品ニ白
 派中船材子可然と後ニ右ノ常時山林山
 之内大材ニ生木い多一居者分枝出し方等其由
 料所之内百持持山諸家順地山林等之内同持生
 木發し居者分由買上ニ伐出し方取針木積を以
 造船法功者ノ神人等ハフレカツトルフエツ

外務省
 文書部

乙其外船ノ木材ノ形状寸同等篤と兼礼し右ノ
 形状ニ相基き由勘定所ニ由船材取集方ハ取計
 木持被併渡木方ニ奉存木且由船材奉音方ニ儀
 山林山ニ分ハ由勘定所進退ニ其ニ付何是ノ由
 諸木ノ苗木植付方其外生木ノ由仕法別段由勘
 定所ニ於テ規律相立木持下仕木得木由料所ノ
 内百姓ノ山林諸家順地等ノ山林ニ直由右ノ仕
 法を及し由擇ノ由至ノ業由儀ニ分別依生木ノ
 仕法等可然と由儀ニ右ノ清國因回由守務
 乙多免通ノ教艘ノ大艦由製造ノ由多々大材

外務省
 文書部

生木方之漁師等より得たる仕法不相立せる船
材之用之至業其二分山林山木材養育方之微ハ
仕法相立大材之生及採し此船材之出方出来
方始相成方之也買上之可相成昔業而此船
之有之然レ後山林山之仕法相立次第右心得
後之他領一見分として等々一仕法立差圖乃ハ
方始之も罷成方之レ後来レ此都合之相成可申
と奉存可然思召方之レ右之振之取計可存可
仕方或此般奉伺方以上

原本月日ヲ既ス

江戸小在り

海軍提督

木下君台下一

日本其地理之形勢自然海軍之修テ候之(き國
か之て喜政府令より山林を見分し候と法別を
定り候一之般多之良材を蓄ゆるの法を謀くる
ふと之竹淫言のふと至緊要なり
大君之附屬之る森林之不知りて亦抄クニ概捕
多ク大木を種ゆふふとを要之是等の木之何と

外 政 効 書

此ニナールトル花雜して種附け傍テ小枝ニ至切
 挿成大ニ成ス由リ政府唯用ウテ石の的ニ成シ
 寸尺を取リぬミ通り切出をふとを治へし
 地ニ日本人ニ屬する林ニテモ政府より木材の
 半ニ取る税人を入ニ良材を思ヒテ、木ニ劣テ
 挿ニ政府へ之租税として是を蓄養せしむへし
 諸般ニ製造ニ用ウテ木材ニ至極乾木ニ成ラズ
 是と木宜故ハ有ニ奉を経たるを以ぬとを
 之ハ政府令より諸台艦ニ製造及ヒテ備修ニた
 り木材を蓄るふとの運ニ致ラシ又良材の一分

外
 務
 省

りん

木ニ海水と清水と交差漫し至而之との台十奉
 式ニ二十年之久を待るとル至元質を失てさる
 とのふと各人の既ハ知る而も是ニ世木材を待
 一ニ至傍而を奈より海水清水ニ急しうらさる格
 江戸の川口を以ぬ而とを世仕方を以木材を行
 一ニ急とを最ぬミ仕方ニテ出火ニ時とい一と
 此手災を免うるへし
 諸製造ニ用ウテ木多物とリニ種カクボワデサ
 ヲボワデレエーニボワデエーニ等なり今日

外
 務
 省

本地ニ産するボワデサワブを最ほのとのまき
と洋多の蓄を要しへし

赤松 杉 檜

杉木を船船上之具枘枘或は水鏡下ニ用る松を
を製するによろし申ユレ赤松ミ方を最ほとき
栗木程同格ニ敷多貯ぬるを要用とを是れ外面
之枘具其外内都ニ造他多ニ多く用ゆる木を
多是亦欠くへうら江榎之木材を採木種楠又
船體之キレト号ニ用ゆるニ宜且楠の方々在
木同格の用をふしへし堅木之大枘車蓋木輪轆

繩蓋其外物之磨塵蓋交而小用ゆるを赤檜及
椎をぬとを較し是号ニ木ヨリ十分倍一益へし
我多思へらく日本政府今より考く山林を見分
し木材を修ふるふとをぬりて是よりらん且
木材之内を木材へ訛差送于他江戸へ送
へし木材之種類左ニ通り

穀牟切らさる赤松杉枘木栗榎楠椎赤檜
是号ニ最要用之木なり只是を熟考せんニ
多木材を見ろを要し

十八百六十五年三月十三日

外 政 力 少 自

[Empty vertical columns for text]

一 佛人より中立を必要に船材尚可照照檢社
 仰付水上船用十全に諸樹諸國に林其外に領
 所内へ培養社 仰付水儀夫勿論に領所外諸
 國よりにも買上へ儀至極適當に儀に彦水得
 共万石以上諸處へも船用諸木培養方而已先
 以社仰渡万石以下に諸本領へも諸木植付方
 英に買上るも可相成誦夫に以福渡有るに
 方別に穩當に以所置ても可有る故に奉存に
 一 此勘定所より船材用諸木培養方其外取計に

外務省

儀ハ勿論ニ儀ニモ可有ク在得共船材ニ儀ニ
其形状ハ寄由直ニ度俾テテハ米至ニ通ル者
之不得共都ニ可施場所ニ寄材質ノ老若其外
本理切削方ニ適宜ニ使用モ有ク趣クニ分俸
人ノ造形學傳習者相受材質點檢方心得者
者差加ノ出役被 仰付方ニ可然哉元來海軍
ハ盛大ノ出都云々ハ度得テ操練所ニ由モ
專門係有ク度儀ニ奉存候

一 現在生本ノ船材ハ買上方ノ領所ニ勿論徳國
私領等モハ船渡モ有ク度奉存者左得テ實一

船用ニ関スルハ易ク曲材ニ有ク在得共其
曲材ハ却ニ家屋其外普通ニ用ル者多ク相用
不申當節ノ趣ニ由直材トハ安價可有ク
之付ハ材木志勿論亦テ諸國百姓共持山等
内ニ數年相経テ曲材ノ分數多可有ク在得共
儀ニ材質切者ノ等ハ船匠等附屬早ク出役被
作付ハ材ト用ルハ伐木亦テ百姓等トハ買
上相成テ格仕度ニ未船用適宜ニ諸樹植付方
之儀ハ船渡ニ世話有ク在得共四五十年内ノ所
用辦ニ成業ニ儀ニ奉存候以上

元五月

造船方

右に西軍艦頭取より差出の書付

乙丑四月廿五日

河蘭陀國に留る西軍艦頭取肥田濱太郎
并西軍艦頭取者西人之義旨相伺の書付

石野氏部
浅野伊賀守

今般伊賀守義佛蘭西國へ為法用致是遠に
旨致 仰汝に委命を西軍艦頭取肥田濱太郎
西軍艦頭取の西人装束船製造器械其外
傳習為法用河蘭陀國へ致是遠彼地滞在に
在るを相別横濱に表へ装束等取取建、并
佛人西軍相成迄、西取建之手継、相成に

外務省

外
務
省

書面石野氏邦外人相伺と趣取朝と交令
政行實と義佛蘭西國一為所用政是遣はし
而者其筋心得し者召連不申はる者是支在
、自以軍艦頭取肥田濱土部軍艦之者為人
蒙鉄船製造器械其外傳習為法用阿蘭陀國一
政是遣彼地滞在在器械の誦言文々之所用
相濟を得と早々帰朝はれ軍艦奉行より
申達は由之委何實と佛國居はし、都る同人、
附屬の用為相勤はれ仕立より趣取兼仕は

外
務
省

委其筋心得ぬを力召連不申はる者居支可
申中の趣者多謂我より多之殊は濱立舟外
即人者装飾船製造機械傳習も請はるの、
我は自は用糸は者可然知と奉存は間都而
伺々通可取計旨石野民部外を人へ致仰後
可然外は奉存は

丑四月

松平對馬守

小野友五郎

書面之趣一覽仕は要便且は相聞は伺伺之
通可取計旨被仰後可然奉存は私共評議
仕此後申上は

外國掛

大目付

小目付

外
務
省

[Blank area for text]

書面一覽即亦仕々此度佛國、為所使放
 其遠々義ハ器械ハ買集方也引受板板
 以趣意ハ有之然ハ要因國ハ英國、ハ以遠
 三月其間不在存成其間幸肥田濱立即外人
 和蘭、而器械ハ用之ハ相勤奉到其
 之而且一船召連々支配向人数少、ハ其
 其間佛國船着ハ多、ハ、早速時上者
 法用為板板ハ至極便也ハ其要置、ハ可
 然義ハ奉存其間其版ハ軍艦奉行、被仰渡

外
務
省

在任仕度此候申上取

丑四月

柴田日向守

外
務
省

以書狀令啓達在任仕度此候申上取
當正月廿九日附取而申入在通相州横濱
賀表、製鉄所取取建之積佛人取雇相成
地平均等取掛取手續等當時専ら取調中
有之取就下、製鉄取製造器械器書并
大小長短等、勿論繪圖面等巨細以細之
上取差越取取、取取取取取取取取取取
相隣取、取取取取取取取取取取取取取
取取取取取取取取取取取取取取取取

外
務
省

以申入水義之委令般柴田日向義方製
錢所器械所號之者使常佛蘭西國一被
差遣之旨被仰付未夕出立日限号ハ治
定不致ハ得共何也ハ為進々出帆可相成
ハ間費格并銘吉布心平共其表之ハ用濟
考ハ共暫時滞留在日向義佛國着之
上者因人其在留地ハ可申進々間佛國ハ
居越諸事是固之請相勤在取可致致在依
之別紙申渡書居進々間者ハ而取取知可
有之ハ

一五月十四日附阿蘭國出費取方ハ小野友
五郎兵衛頭連名宛ハ而居越在書狀當四
月二日到着枚見ハ多ハ在古書狀中ハ越ハ
兼ハ以渡可相成洋銀貳拾万井之内砂拾
万井之分差立方之義精々ハ越ハ要者者
兼ハ當五月ハ入ハ得ハ速々為替仕組可
差立積之要便申入ハ通横須賀表製錢
所取取建二旨而ハ佛人ハ品々申立ハ越ハ
者之費格出立前之仕組ハハ大造之目論
先相成在ハ自器械所相濟ハハ速々

外
文
書
目
録

屏圖の幅中入の程の場合ニ自格別之出入
用高ニ相成間敷左之礼ハ扨前持越
拾万并丈之上而大餘率是之可中見込ニ自
為替之義月相延之義之要此處社十越在
極ニ右者扨前部拾万并之要猶部拾万并
左廻一之礼放十越得共者時格外洋用
途多之折柄ニ右側ニ拾万并より容易
右後方難相成程之義ニハ右得共精々建白
い多し漸請取方相成此度ニ為替ニ而差
廻一之次第ニ付今便改而部拾万并之分

右後方之義い上之在治定不相成之留左
推法承知可有之也

一亞國の買上之器械繪圖面之義權須要於
要用、自差違不十在越先便中入之要右
、右之不都合之義ニ可有之と存之留為
寫取別差違中在

右之帳可得の意如是の座長以上

四月 日

石野 民部

本 下 謹 告

肥田 濱 三 平 氏

外 安 力 三

尚以銘音第心平ハ其方々通達有之
其極存也

国立公文書館 アジア歴史資料センター

Japan Center for Asian Historical Records

通 74-0660

<http://www.jacar.go.jp>